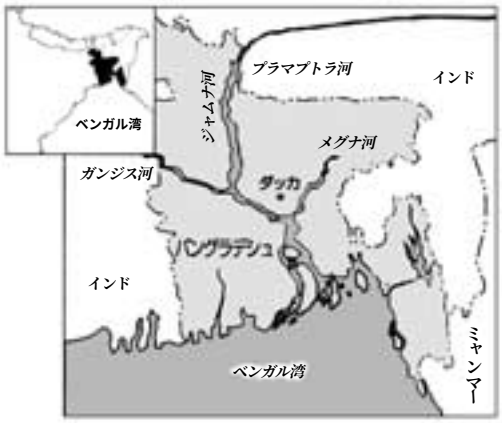
「ユニセフ子ども物語」

地球に生きる子どものくらし

People's Republic of Bangladesh

バングラデシュ人民共和国



©日本ユニセフ協会

工場から学校へ

ナズマの物語

街の風に花のかおりがただよい、ナズマの心ははずみました。ここはバングラデシュのダッカ。たくさんの車やオートバイが行き交い、子どもたちがくだものや新聞を売っています。きのうまで、ナズマはこの道を通って織物工場へ通っていました。でも、今日からは、ナズマは小学校の1年生です。ナズマはもう12歳ですが、今まで学校に行ったことはありませんでした。

＊＊＊＊＊

ナズマは6歳の時から、織物工場で働いていました。工場での生活を思い出すと、ナズマはつらい気持ちになります。週に6日、毎日朝8時から夜8時まで、遅いときには夜10時まで働き続けました。短い休み時間以外、ちょっとでも手を止めればしかられました。顔をあげたり、のびをすることもできないので、背中や腕はいつもしびれるように痛く、指先ははれていました。でも、休めば工場をやめさせられます。すると家族のくらしはたちどころに困ってしまいます。お父さんは毎日危険な建築現場で働き、お母さんはゴミ捨て場から売れるものをさがしてきて売る仕事をしています。ナズマの上の2人のきょうだいも工場で働いています。それでも、5人きょうだいの一家の生活には十分ではありません。ナズマの給料は一家の支えだったのです。ナズマの織るきれいな色の布模様が涙でにじんでも、ナズマは歯をくいしばってがんばるほかありませんでした。

＊＊＊＊＊

そんなある日、工場の子どもたちはみんなやめさせられるというわさを聞いて、ナズマは恐ろしくなりました。工場で働けなくなると、ナズマは別の仕事をさがさなければなりません。でも、工場よりもいい仕事なんてめったに見つかりません。運が悪ければ、女の子のナズマは、家を出て住み込みのお手伝いになるしかありません。ナズマの幼なじみのサフィアは住み込みのお手伝いになりましたが、工場よりも安い給料で、寝るひまもないほどこき使われ、その上、雇い主が毎日のようにサフィアをぶつのだ、と聞かされていました。

工場主が子どもたちを集めて話をはじめたときも、ナズマは今にも泣き出しそうでした。

「みんな、これまでよく働いてくれたね。でも来月から、みんなはここで働かなくてもよくなったんだ」。子どもたちはしんと静まりました。

「実は、ユニセフの人たちと話し合ったんだよ。子どもたちはつらい仕事をやめて学校に行かなければだめだってね」

学校…、だれもこのことばを想像していませんでした。

「給料のことなら心配しなくてもいいんだ。みんなが学校を卒業するまで、ユニセフやほかの団体の人たちが毎月の給料分のお金をみんなに支払ってくれるから。君たちは、そのお金を生活費や学校のお金にあてればいい」

子どもたちは何がどうなるのかよくわからず、きつねにつままれたような顔をしています。

「どうしたんだい。みんなは来月からこの工場の敷地のはずれに新しくできる学校の生徒になるんだよ。しっかり勉強してがんばりなさい」

ナズマはやっと、工場で働かなくてすむこと、ほかの仕事をさがさなくてもいいこと、そして学校に行けるということがわかりました。ほっとしたのと、思いもかけないうれしい知らせに、ナズマは笑っていいのか泣いていいのか分かりませんでした。

＊＊＊＊＊

そして、今朝、ナズマははじめての学校への道を歩いています。工場のはずれにある学校は、いかにもわかづくりの小屋ですが、ナズマには未来への入口のように見えました。先生が入口で、みんなを迎えてくれています。ナズマは思わずかけだしました。学校の横には、まだ名前の知らない白い花が、いいかおりをただよわせて満開に咲いていました。　（文：日本ユニセフ協会）

©日本ユニセフ協会

ナズマが学校に行けるようになるまで

バングラデシュ衣料製造輸出業者組合（BGMEA）・ユニセフ・国際労働機関（ILO）が働く子どもたちの就学について合意に至るまで

衣料品はバングラデシュの主要産業です。1993年まで、6万5千人以上の子どもたちが、衣料品工場で働いていました。しかし、アメリカ合衆国で児童労働のようすが報道されると、反児童労働の気運が高まり、バングラデシュ製品をボイコットする運動がはじまりました。リーバイストラウス、リーボックなどの大企業もこれに加わりました。

驚いた衣料品業界は、5万人の子どもたちを解雇しました。しかし、失業した子どもたちは学校に行けるどころか、たちまち生活に苦しむようになり、より劣悪で危険な労働に従事せざるを得なくなったのです。なかには、路上で非行や売春にはしる子どもたちもあらわれました。

これに対処するため、バングラデシュ衣料製造輸出業者組合（BGMEA）・ユニセフ・ILOなどは、2年間協議を続け、工場で働く子どもたちが、労働から解放されても生活に困らず、学校に行けるようにするための方策を探ってきました。1995年、BGMEA・ユニセフ・ILOは合意に達し、BGMEA加盟の1821の工場では14歳未満の子どもは雇用しないこと、当時約900の工場で雇用されていた1万500人の子どもたちを解雇し就学させることが約束されました。その方策として、工場をやめる子どもたちには給料分の毎月300タカ（7.5米ドル）が支払われること、工場の欠員にはやめた子どもの家族から成人を雇用することなどが決められました。子どもたちを受け入れる学校の整備もユニセフ・ILO・バングラデシュ政府が協力して進め、各機関の資金援助のほか、BGMEAも約100万米ドルの資金拠出を行うことを約束しました。

1996年10月現在、工場で働いていた子どもたちのために135の教室が新たに開かれ、4000人の子どもたちが勉強しています（BGMEAは受け入れる学校が整うまでは子どもを解雇しないことを約束しています）。

バングラデシュの児童労働

どんな仕事をしているの？

都市部：・住み込みの家事手伝い
・物売り　・靴みがき　・廃品収集
・家内工場の労働者
・公的機関の労働者（少数）
・その他（れんが割り、ポーター、性産業に従事など）

農村部：農業（働く少年の79%、働く少女の25%）
家事（働く少女の71%）

農業に従事する子どもの多くは家族と一緒に働く。残りの子どもたちの仕事ははたおり、物売りなど。

何時間働いているの？

住み込みの家事手伝いの場合：
朝6時から真夜中まで、週7日
工場労働の場合：平均1日9.6時間
織物工場の場合：標準労働時間8時間、ただし12〜14時間働く日も
廃品収集の場合：朝7時から夕方くらいまで

どんな生活環境なの？

・都会で働く子どもの2/3は家族とくらしている。しかし職場が遠いために、毎日は家に帰れない子どももいる。約20%の子どもは職場や雇い主の家で夜を過ごしている。
・働く子どもたちの半分以上は川や池で水浴する。トイレのある生活をしている子どもは約40%。

◉ユレカ、13歳、女の子、住み込みの手伝い

故郷の村の家族は、土地がないからとても貧しいわ。おじがこの仕事を見つけてきたの。もう2年働いてるけれど、月給は60タカ。朝6時から夜11時までが仕事時間。休み時間は昼間の2時間。たいていテレビを見ているわ。食事は残り物だけれど、結構いいものが食べられる。家族にところに帰るのは年1回かな。

◉アミナ、10歳、女の子、れんが割り

おかあさんと姉さんといっしょに建築現場でれんがを割ってるの。100個を粉々に割って30タカ。時々ハンマーがすべったり、れんがの破片が当たることもある。手が痛くてしかたない日は紙ゴミを拾う仕事をするの。今まで学校には行ったことがないわ。

◉ラフィク、9歳、男の子、袋売り

家族はおかあさんとまだ赤ちゃんの妹。前は学校に行けたんだけど、お金がないからやめた。その後、機械工場で働きはじめたんだけど、工場主は給料を払わず、食事を出してくれるだけだった。おまけによくなぐられたからやめたよ。今はポリエチレンの袋を1タカで仕入れて、マーケットで2タカで売っているんだ。1日20タカくらいになるよ。学校は楽しかったし、また行きたいと思ってる。

（1タカ＝約3円）

日本とバングラデシュとの貿易（1994年）

バングラデシュ

繊維製品、繊維原料、エビなど 9,000万米ドル →

← 機械機器、金属品、化学工業品など 3億9,500万米ドル

日本

■参考資料：MOFAX外務省